# BATTLE BALLER HARUKA

# Ⅱ－1

## 奇襲

## Ψ

## (Eternity Flame)

# バトルボーラーはるか

## 第二集
## 星間戦争

## 第**1**章
## 奇襲

作・Ψ　**(Eternity Flame)**

前作では興奮するあまり、私の感情が端々(はしばし)に盛り込まれてしまった。今回は、なるべく淡々と説明に徹したいと思う。

「待ってよぉ～、はるかー。」
「キャハハッ、ヤダよーだ。」
リンシャンとの激闘を終え、沙織(さおり)の体力が回復した頃には、ちょうど世間はゴールデンウィークとなっていた。
沙織の快気(かいき)祝いを兼ねて、はるかが旅行をしようと提案し、秀樹(ひでき)と正友(まさとも)を誘い**USJ**まで遊びに来ていた。
「もぉ～、待ってったらぁー。」
「早くしないと置いてくよーっ。」
こういう場に来ると、沙織とはるかの立場は逆転し、元気いっぱいのはるかに引っぱり回される沙織であった。
連休中の人混にごった返す中。男達は蚊帳(かや)の外で女の子同士はしゃぎまくっている。秀樹と正友は朝イチに発売される優待券を手に入れる為に奔走(ほんそう)し、いくつかアトラクションを回ってく内に、疲れてしまい、はるか達から離れ、早々に長い休憩を取っていた。
「あれッ！？そう言えばお兄ちゃんは**…**」
「なんか疲れたって言ってぇ休んでるよぉー。」
「せっかく**USJ**まで来たのに**…**だらしないんだから。」
「お兄さん達、昨日まで仕事してたしぃ、無理もないよぉ。それよりさ、次、アソコ行こぉ！」
束(つか)の間の休憩。はるか達が喜んでくれればと、段取りをした秀樹と正友だが。前日まで忙しく仕事をしていたので、疲れ果ててベンチでうなだれている。
五月とはいえ、人混みにごった返す熱気は相当なものであり、強行軍に疲れた二人には、このベンチでうなだれてる事が休息なのかも知れない。対照的な二組の男女。男と女というよりは子供と保護者と言った感じだ。
「秀さん。」
「**…**ん、何だ！？」
「アイツら元気だな。」
「う**…**ん**…**そだな。」
正友の問いかけに、うつらうつらしながら答える秀樹。出発の直前まで大忙しだった秀樹は、大阪までの運転も担当して相当に眠そうだ。

「暑い…な…。」
「ホント暑いね。あぁ分かった！オレらの隣でリンボーダンスやってる人がいるからだ！」
「…そうなんだ…。」
「んなワケねーでしょうが！…秀さん…！？」
「南国…か！？…クゥー…zzz。」
「おーい、秀さーん？もしもーし…あーぁ寝ちゃったよ。」
正友のボケに朦朧(もうろう)としながらも、タカ＆トシ風のノリツッコミをして、秀樹は眠ってしまった。
「秀さん寝てるし、はるか達はどっか行っちゃたし、どうすっかな…。」
開園してまだ何時間も経っておらず、正友はどう暇を潰せばいいのか迷っていた。正友の趣味とは、このテーマパークとは無縁の物であったし、並んだり待ったりという混雑が彼は嫌いだったのである。
「大阪まで来てナンパってのも何だしなー。」
秀樹を置いたままにして、ぶらぶらと正友が歩いていると、はるかと沙織に出くわした。
「正友！？」
「おっ、はるかじゃん。」
「アンタ、ドコ行ってたのよ？」
「いや、秀さんとベンチで一服してたんだけどさぁ。秀さん寝ちゃってさー。」
「どーせナンパでもしてたんじゃないの？」
「バカッ、誰が大阪くんだりまで来てそんな事…おっ！？」
「何よ。どうしたのよ？」
「あのお姉さん達カワイイな。」
「馬っ鹿じゃないの。せっかくＵＳＪまで来たのに、女の人を見て鼻の下伸ばして。徳島でやってるコトと変わらないじゃない。何しに来たのよ！」

「バカッ。お前らの保護者として俺はだなー。あの、ホレ…女の子だけじゃ危ないだろッ。都会は変なオジさんとかいっぱいいるんだぞ！」
「変な人って、アンタのコトじゃないの？」
「そうそう。女子高生を見るとイタズラしたくなって…って、おい！いい加減にしろよな！」見かねた沙織が話に割って入ってきた。
「はるかー、言い過ぎだよー！正友さぁん、一緒にウォーターワールド見に行きませんかぁ？」
「沙織ちゃんはやさしいな。沙織ちゃんの言葉でスゴく癒(いや)されたよ。心にジーンと来たなぁ。あぁ…沙織ちゃんカワイイし、何だか惚れてしまいそう。」
「そら、変態が出た。バーカバーカ！！」
「何をーッ！！」
「はるかー。正友さんもケンカは止めてぇ、一緒に回ろぉ、ねっ！」
沙織の仲介により、はるかと正友は互いにそっぽを向き合いながらも、ウォーターワールドのアトラクションへと向かった。
「ところでよォ、ウォーターワールドって何なん？」
「そんな事も知らないの。」
「映画はあんまり観ないんですかぁ？」
「うん。アニメなら観るんだけどな…」
「海賊の映画があったのよ、未来版のね。」
はるかはエラく大ざっぱな説明をしたが、人の話を聞かない正友には、ちょうどいい長さなのかも知れない。
「ふーん、そうなん…おっ！？そう言われるとこんな所に巨大な海賊が…。」
アトラクションに入ってもいないのに、正友が発見したと勘違いしたのは、長身の大男の後ろ姿であった。男はすうっと正友を振り返った。
「こんな所に、海賊がいるワケないでしょ！馬っ鹿じゃないのアンタ！…あの失礼な事言って、ごめんなさい…。」

はるかが謝っているにも関わらず、男は無口にソコを通り過ぎて行った。
「もぉ、怒らせちゃったじゃないの。」
「まぁもう済んだコトだしぃ。いいじゃない、はるかぁー。」
「…なんか匂うな。」
「えっ！？…なんか言った？正友。」
「いやっ、何でもない…行こうか。」
一旦、アトラクションを回り出すと、不審な男の事などはさっぱり忘れてしまったかのように、正友ははしゃいでいる。
「なんだかんだ言って楽しいんじゃないの？アンタ。」
「うん。意外と楽しいなココ。」
「アソコにＥＴの人形があるよぉ。」
「おっ、懐かしいな。」
ＥＴの人形を見かけて、正友が一番に駆け寄っていった。
「アイツが一番はしゃいでるじゃない。ホントに子供なんだから…」
「なんかぁー。はるかって正友さんにはエラく厳しくなぁい？」
「そんな事ないわよ。アイツがわたしを無視したり、からかったりするから、ケチョンケチョンに言われるだけよ。」
「おい、はるかー。」
「何よ？」
「これ知ってるか？」
正友がＥＴにひと差し指をさし出した。
「知らないわよ。」
「お前知らねーの！？これ有名なシーンなんだぜ。」
「だからどうだって言うのよ。」
「お前、そんなん知らねーでＵＳＪを語るなよ！」
「アンタだって全然知らないじゃない。ワケ分かんないコト言わないでよ！…ッとに、馬っ鹿じゃないの！！」
怒っているはるかの言葉などは、聞く耳を持たず、正友はいつものように一方的に話を進めた。

「ところでさー。お前、エイリアンって見た事ある？」
「あるワケないでしょ。意味分かんない事言わないでよッ。大体アンタは…」
「はるかー。夫婦喧嘩はヤメて、秀樹お兄さんトコ行こうよぉー。」
「ちょっと沙織ーッ。誰が夫婦なのよッ！！」
「わーッ。はるかが怒りんぼさんになったぁーッ。」
「もー、待ちなさいッ！」
ＵＳＪに来た時とは逆に、はるかの方が今度は沙織を追いかけていた。一息ついた秀樹が合流し、夕方まで遊ぶと、梅田のホテルに宿泊すべく車で向かった。
「あーぁ。ＵＳＪのホテルで泊まりたかったなぁ。」
よほど楽しかったのか、車窓よりもの哀しそうにＵＳＪを眺(なが)めながら、そう呟(つぶや)くはるか。
「贅沢(ぜいたく)言うなよ、はるか。秀さんだって、忙しいんだからな。」
「でも、何で梅田のホテルまで行くの？」
「それはだな…」
秀樹が答えようとすると―
「情報収集だよ。決まってんだろ！」
「なんでアンタが答えるのよ。」
「正友の言ってる通りだ。俺の伯父さんが、ダークエンジェルズに関する情報を仕入れてて、話を聞きに行くんだ。」
「どんな情報なのかなぁ…」
「お前、バカだな。それを聞きに行くんだろ！」
「アンタと話してるんじゃないわよッ！もーッ、話の腰を折らないでよ。電話で何か他に聞いてないかって事よッ。」
「ここはダークエンジェルズの拠点(きょてん)の一つがあるみたいだから、伯父さんも電話じゃ話しにくかったんじゃないだろうか。それもじきにはっきりする。さぁ、チェックインしに行くぞ。」
着いたのは航空会社の経営するホテルで、北新地の一等地にあった。
「綺麗なホテルだねー。」
照明を少し暗くしたロビーが、落ち着いた感じを醸(かも)し出し、都会的な雰囲気に沙織は酔っている。

「こんな綺麗な所に泊まるの？」
田舎からきて、いきなり豪華(ごうか)なホテルを見たはるかは、そう言い目を丸くしていたかと思うと、急に正友を問い詰めだした。
「ちょっとぉ、正友！」
「何だよッ。」
「なんでこんな歓楽街(かんらくがい)のど真ん中のホテルに泊まるのよ？」
「いやぁ、綺麗だろ！このホテル。」
「はぐらかさないでよ。アンタ、ひょっとして飲み行く為にここ借りたんじゃないの！？」
「さ、チェックインしようぜッ。」
「だから人の話を聞きなさいッ！！」
「はるか、恥かしいからケンカはロビーを出てからにしてくれ。」
「だってお兄ちゃん正友が**…**ごめんなさい。」
フロントで手続きを済ませると、夕食を取り、はるかと沙織は部屋に休みに入ったが、秀樹は伯父に会いに、正友は情報収集と称して盛り場に繰り出していた。
「ふんふーん♪」
鼻唄交じりにスキップしながら、嬉しそうに歩いている正友。
「**ROUNGE**サクラの早智子(さちこ)ちゃん、元気にしてるかなぁ♪」
お目当ての女の子に会えるのを、相当、楽しみにしていたのだが**…**。
「ちょっとォー、そこのお兄さーん。」
スチュワーデスのコスプレをした美女が、正友を呼び止めた。
「おっ、お姉さん達カワイイね。どこのお店にいるんや？」
「お兄さん、飲みに寄ってぇ。」
「えーッ、どうしよっかなぁ。先約(せんやく)あるねんけどなぁ**…**」
「ウチに寄ってから行きましょうよー。」
美女は強引に正友の腕を摑(つか)み、店に引き入れようとした。
「えっ、おいおい**…**しょうがねぇなぁ。」

困ったような口ぶりではあったが、顔はとても嬉しそうにしている正友。エレベーターで最上階まで行くと、階段を上がり出した。
「お店って上にあんの？」
「そうよお兄さん。近くで見るといい男ねぇ。」
「へへへ…お姉さんも美人やね。」
明らかにおかしなシチュエーションだが、上機嫌の正友は、案内されるがままに非常階段を上り、屋上のドアを開ける。中は意外にも小奇麗(こぎれい)なスナックになっていた。
「おっ！？いい店だねぇ。」
「いらっしゃーい。」
「おっ、この娘もカワイイ！いらっしゃいましたよー♪」
二人の美女に左右の腕を恋人のように組まれ、正友がデレデレしていると・・・
ガシャ×２
「へっ！？…」
突然、何かをロックするような機械音に、正友はきょとんとしていたが、歩こうとすると体の自由が利かず。両隣の美女二人を見てみると、死んだように固まっていて、自分の両腕に手錠が掛けられ、拘束(こうそく)されてるような状態になってしまっていた。
「な、何だこれ！？」
「かかりましたね…」
「誰だッ！！」
ドコからともなく聞こえる声。
正友の呼びかけに反応するかのように、スナックの装飾が消え去ると、がらんどうのビルの屋上となり。歓楽街(かんらくがい)のネオンの薄明かりに男の影が佇(たたず)んでいた。
「貴様、誰だッ！？」
遠くにいた時は遠近感(えんきんかん)で分からずにいたが、だんだんと近づくに連れ、男は相当な巨躯(きょく)である事が分かった。
「はじめまして私は八野と申します。」
「八野さん？…知らねーな。」
「だから〝はじめまして〟って言ったでしょうが。本当に呑み込みが悪いと言うか、頭の悪い人だ。」
「何だとッ。おい、お前！コレなんの真似だよッ！」

「ソレはアンドロイド。私の命令を何でも聞く従順(じゅうじゅん)なロボットです。」
「ならオレの腕から離れさせろよッ。」
タキシードを着て紳士のように振舞っている八野が、不適な笑みを浮かべた。
「それは出来ませんな。」
「何でだよッ。お前、オレをナメてんのか？このロボットがぶっ壊れたとかいうオチくらいじゃ許さねェぞッ！」
「いいえ、あなたにはここで死んでもらうからダメだと言ったのです。」
「何ッ！？」
次の瞬間、二体の美人アンドロイドが大爆発を起こした。
その頃―
「もしもし。今、高速降りましたんでもうすぐ着きます。それじゃ…」
電車での移動を終え、伯父の指定する場所へとタクシーで向かっていた秀樹。だんだんと人気の無い場所へと車は走っていたが、土地勘のない秀樹には、それがドコなのかさえ分かっていない。
「運転手さん。何で急に止まるんですか？」
フロントガラスに向いていた運転手の首が１８０度回転し、後部座席の秀樹を見つめた。
「えっ！？」
「あっ」と秀樹が驚いていると、逃げる間もなく運転手が自爆し、タクシーごと吹っ飛ばした。囂々(ごうごう)と燃えさかる車体。それを静かに見ている男がいた。
「…死んだか。」
急に大雨が降り出したかと思うと、男は何者かに急襲(きゅうしゅう)された。
「グフッ！！…」
男は血ヘドを吐き、そこにひざまずいた。
「お前、誰の回し者だッ！？」
そう言う秀樹は、内力(メキド)を使って爆発の衝撃をくい止めつつ、その推進力(すいしんりょく)で空中へと難を逃れ反撃に転じていたのであった。
「貴様、どうやって防いだ？」
舌で血を拭うと、男が秀樹に問いかけた。
「お前に説明する理由はない！お前こそ誰の回し者だッ。」
秀樹が逆質問した相手。それは昼間、正友がＵＳＪで失言を放った男であったが、その場に居合わせなかった秀樹は知らなかった。

黒い袴(はかま)のようないで立ちに、鎖(くさり)つきの斧を手に虚(うつ)ろな目をした巨体の男。その虚ろな目が、険しくなったかと思うと、問答無用といった感じで秀樹に襲いかかって来た。
「フッ…腕ずくで訊(き)くしかないみたいだなッ！！」
男は恵まれた体格を生かし、重そうな大斧を力いっぱい秀樹めがけて投げつけた。
「迅(はや)いッ！？」
投げつけた斧の飛ぶ迅(はや)さも然(さ)ることながら、巨体に似合わぬ脚力を見せて間合いを詰める男。不意を突かれた秀樹に、丸太のように太い腕から放たれる、男のラリアットが直撃した。
「くッ、かはッ…!!」
「…死ねッ。」
そう言い、吹き飛ばされた秀樹に追い討ちをかけようとすると、男は体が急に重くなるのを感じた。
「うぬぅぅー…!!」
足の重みに耐(た)えながら男は走ったが、さっきの半分もスピードを出す事ができず、秀樹は悠々(ゆうゆう)と立ち上がった。
「貴様、何した？」
「答える必要はないッ。」
体勢を立て直した秀樹。今度はあべこべに男が反撃に遭(あ)った。
「うぐうぅぅ…!!」
体を丸め込み急所をガードする男。秀樹の重厚(じゅうこう)なる攻撃をもってしても、そのガードを切り崩す事が出来ないでいた。
「うぅ…うがぁぁああーーッ!!」
男が大声と共にガードを解くと、その風圧で秀樹が弾き飛ばされた。
「くッ、何だコイツ…?」
着地した秀樹に男がボソッと言葉を発した。
「…時間だ。」
「何？…はっ!?」
意味不明な事を呟くと、斧をまた投げつけ、秀樹が躱(かわ)そうと身構えると、その斧は飛行途中で爆発した。
「くッ…。」
爆発の余波(よは)に翻(ひる)んだ秀樹。爆風が止み、辺りを見回すと、既(すで)に男の姿はなかった。
「何だったんだ一体…はっ!?まさか…!!」
虫の勘(かん)が働いたのか。はるか達の事が気になった秀樹は、急いでホテルに引き返して行った。

「ゴホゴホッ…。んー、時間かせぎのつもりが殺しちゃいましたかねぇ。」
その頃。北新地の屋上では、爆発の煙が濛々(もうもう)と立ち上がる中。八野がハンカチで口を塞(ふさ)ぎながら、正友は死んだ物と決めつけるようにそう言い、遺体がいると思われる爆炎(ばくえん)の光を楽しそうに見つめていた。
「誰が死んだって？」
「ん？…ぐおぁッ、な、なんだこの風はッ？…」
急に暴風が吹き荒れだし、その風は炎や煙を含み八野の瞳を眩(くら)ますと、その間隙(かんげき)を縫(ぬ)って重い風の塊が打撃のようになって、八野の横腹と顎(あご)にワン・ツーブローとなってヒットした。
「ぐぉぉぉ…。」
「トドメだ。倒れろよ…ッと！！」
自らの足でノックアウトしようとして、正友が八野に迫ると。ドコからともなく数体のアンドロイドが現れ、横槍を入れられてしまい、好機を逃した。正友は距離を取り、八野に話しかけた。
「何故、俺を狙う。」
「然(さ)るお方のご命令でしてな。それよりも先程の自爆をどう逃れたのかな？」
「俺、北新地来る時はスーツ着て、その下に義手(ぎしゅ)を付けるんだよね。」
「ははは、ご冗談を。スーツの袖(そで)の中に風のオーラを満たし、腕に見せかけていたのですね。私のペット二体は偽の腕を摑(つか)まされていた。それで貴殿に逃げられた。違いますか？」
「ご明答。どうやらオレの事、ある程度は知ってるみたいだな。」
「ならばいつ頃、ペット達が貴殿を罠(わな)にハメようとしたのを気付かれたのかな？」
「人の事バカ呼ばわりしてたけど。アンタ、アホやな。」
「なんだとッ！！」

「人間の女に似せてオレをハメようってんなら、もうちょっと工夫しろよな。アイツらからは、〝息づかい〟が感じられなかったぜ！」
「息づかい？」
「人間は有機物ですやろ？生体機能もちゃんと真似なイケまへんがな。お宅の人形ちゃんからは、その息づかいが感じられまへんでしてん。分かりまっか？」
正友特有のオチョくるような口ぶり。
「そのフザけた口調を止めろッ！！」
「なんや～。せっかく人が分かり易(やす)ぅ説明したろ思て大阪弁使こてんのに…感じ悪いわぁ。」
「フフフッ…どうやら貴殿を甘く見過ぎていたようですね。」
人間は口や毛穴からも呼吸をしている。それらは熱や水分を帯び、微量ではあるが気流を作りだしたりもする。風を操る正友は、敏感にそれを察知していて、アンドロイドに対して気を許していなかった。その事が分かったので、八野は正友に一目置き、改めて冷静さを取り戻していた。
「じゃあ、そろそろオレ行かせてもらうわ。」
「何ッ、私と戦わないのですか？」
「早智子チャンが待ってるから。…また今度相手にしてやるよん♪」
「フッ、私も随分(ずいぶん)と甘く見られた物ですね。しかし、ココからそう簡単に脱け出せますかな。」
「どういう事だ？」
正友が非常階段に向かおうとすると、寸前(すんぜん)で体中に痛みが走った。
「あ痛ッ…何じゃこりゃ!?」
「ここは超強力な電磁波を流し、外界からはシャットアウトされているのですよ。私を倒して、私の持っているスイッチを切らなければ出られません。」
見た目には何ら変哲(へんてつ)もない景色が続いているように思われただけに、正友はびっくりした様子であった。
「それよりも周りをみてごらんなさい。」
「これは・・・！？」
痛がっている間に、正友はアンドロイドの群れに取り囲まれていた。
「心ゆくまで遊んでって下さい。」
「まだいたの。…しょうがねぇ、一丁揉(も)んでやるか。」

数体のアンドロイドが、マシンガンを手に正友を狙ったが、トリガーを引くと銃が暴発してしまい、両腕が吹き飛んで戦闘不能となってしまった。

「八野とか言ったな。お前、後で覚えとけよッ！！」

圧縮した空気を銃口(じゅうこう)に送り込んだ正友。人工知能を搭載(とうさい)したアンドロイド達は、銃火機(じゅうかき)の使用を止め、肉弾戦を仕掛けてきた。

「フッ、面白い。おい、ロボット共！オレが空手の稽古(けいこ)をつけてやるから喜べ！！…って言っても心がないか…。」

アンドロイド達は縦一列になり、コンピュータ独特の一糸(いっし)乱れぬ動きで、正友の視覚を混乱させようとしていた。

一斉に猛(もう)ダッシュしてきたかと思うと、前衛(ぜんえい)の一体が正友に迫る直前で、後続のアンドロイドが一斉に散らばり、横一列になって総攻撃を行ってきた。

「しゃらくせぇーッ！」

最初にナイフを突きつけてきたアンドロイドの一体。その右腕が正友の心臓に届く寸前に、正友は手首を返し、自らの腕を、アンドロイドの攻撃の外側から被せるようにして手首を摑(つか)むと、くの字に曲がった形となった正友の右(みぎ)肘(ひじ)。相手へと向いた肘の先を真下に向くようにしただけで、アンドロイドの右腕は捩(ねじ)りあげられてしまっていた。

間髪(かんぱつ)入れずに左右から、一体ずつアンドロイドがナイフで襲いかかってきたが、右足で左側からの攻撃を弾くと、そのまま流れるようにして右肘で胸に肘鉄(ひじてつ)を喰らわした。

背後から迫りくる格好となった右側のアンドロイドの左手が、回り込むようにナイフを突きつけてきたので、半歩身を引き相手を確認すると、そのまま攻撃を迎え入れるかのように、ナイフに向かって垂直に胸板を向けた。

すると、一番最初に前面の敵の攻撃を逆手で摑み取った要領(ようりょう)で、左手で相手の左手首を外側から摑み、そのまま引っ張ると、アンドロイドの体は正友とすれ違ってしまい、ガラ空きの脇腹(わきばら)に掌手(しょうてい)を浴びせた。

「ナイフの持ち方くらい入力しとけってのッ！！」
そう余裕をみせる正友であったが―
すかさず左右の斜(なな)め上から、それぞれ一体ずつのアンドロイドが、風の谷のナウシカのユパ様のように、逆手持ちにナイフを振り下ろしてきた。
右側からの一体の左手の攻撃を、肘に向かって正友がアッパーカットのように掌手(しょうてい)を打つと、アンドロイドはひっくり返りそうになり、横蹴りで吹き飛ばされた。左側からの敵に対しては、右足での後ろ回し蹴りで一蹴(いっしゅう)してしまった。
「次はアンタの番だな、八野さんよォ。」
「フフフ。なら少し相手をしてあげましょうか。」
懐中時計(かいちゅうどけい)をポケットから取り出し、チラリと時間を確認した八野。
「何、上から物言ってんねん。ボコボコにしてやるから、かかって来んかい！このウ〇コタレがッ。」
八野の言い草にカチンときた正友が、罵声(ばせい)を浴びせた。
「…貴様ぁぁ…ワシを愚弄(ぐろう)するかぁぁ…ナメるなよッ！！」
「何だこりゃ？？？」
小学生並みの正友の挑発に、怒り狂った八野の体から、どす黒い紫色のオーラが溢れ出してきた。
「死ねぇッ！！」
離れた所から対峙(たいじ)する正友に向かい、八野が正拳突(せいけんづ)きを放つと、拳圧が風を巻き起こし、岩のような塊となって唸(うな)りを上げながら、剛速球(ごうそっきゅう)のようになって襲いかかって来た。
「うわッ…！？」
その剛拳(ごうけん)の迅(はや)さと威力に驚く正友。完全に避けたつもりだったが、風圧が頬(ほほ)を掠(かす)めカスリ傷を負っていた。
「痛ッ！？これは…?」
正友の横を通り過ぎた正拳型の風の塊は、電磁波でコーティングされた透明の壁にぶつかると、その壁に大きな拳の跡をめり込ませていた。

爆音に思わず後ろを振り返ってしまった正友。
「隙(すき)アリッ!!」
一挙(いっきょ)に距離を詰めてきた八野が、正友の左側面に回り殴りかかってきた。正友は脇を締め左腕を使ってガードしようとした。
「くッ、何ッ…!?」
八野のパワーに正友のガードは弾かれ、吹き飛ばされてしまった。
「ぐはッ…。」
空中で一回転し、体勢を立て直す正友。着地と共に切り返して八野の連続攻撃を躱(かわ)し、何やら構えを取った。
「その構えは!?…」
同じく身構えた八野の空手の型を見て、正友は目を疑った。
「お前、何故オレと同じ型を…?」
「フフフ。この龍球空手の事ですかな。」
「何故それを？…」
「門外不出(もんがいふしゅつ)の武道を、なぜ私が知ってるかと訊(き)きたいのでしょうが、それは教えられません。」
正友に一撃入れた事により、八野は得意気な顔をしてそう答えた。常に自分に自身を持ち、余裕しゃくしゃくの態度でいる正友が、同門の対決を意識し、真剣な顔つきをしてるのが、龍球空手なる武道の凄さを物語っていた。
「どうやらアンタはオレの先輩みたいだが、何故オレを狙うんだ？」
「それはまた今度お話ししましょう。」
「おい、待てッ!!」
立ち去ろうとする八野を追撃(ついげき)しようとしたが、アンドロイド達が再起動し、正友を囲んだかと思うと、立て続けに爆発し行く手を阻(はば)んだ。
「くそッ、何だアイツ…!!」
風の内力で自らの体を護った正友だが、やられっぱなしで去られた事への悔しさと、意味深な八野の発言に胸さわぎを感じ、はるかの泊まるホテルへと急いで引き返して行った。

一方、はるかの宿泊するホテルでは―

「**502…**ここですね**…**。」

夜も更けようとしていた頃。はるかと沙織がぐっすり眠りこける部屋の前に、一人の男が立っていた。

「やってまいりましたぁ。現役女子高生お部屋訪問。」

ビデオ片手に、男はアイドルの寝起きに突入するリポーター口調で、今まさにはるか達の眠る部屋に忍び込もうとしている。

「いやぁ、私、興奮(こうふん)して参りました。いったい全体、現役の女子高生はどんな寝顔を見せてくれるのでしょうか。楽しみであります。」

自分で自分をカメラで撮り、声を押し殺しながらも一人興奮して鼻息を荒くしている男。

ガチャ。

「か、鍵が空きましたッ。いよいよです。それでは早速、突入したいと思います。」

いざ禁断の花園へといった具合で、不敵な笑みを浮かべ部屋ドアを開けようとする男。

「待ちなさい。」

男が突入の一歩を踏み出そうとすると、背後からそう呼び止める女の声がした。

「おっと、ここでアクシデントが**…**私の後ろから私を呼び止める女性の声がします！」

「いい加減にフザけるのはヤメにしたら？」

「おっと、この声の主は、雷帝門の首領チャン・リンシャンさんのようだ！」

「フザけるのをヤメないと射抜くわよ。」

「**…**チャンさん。何時から私達の敵になったんでしょうか？」

「元より仲間だったワケでもないでしょ？」

「と、言う事だそうです。」

「さぁ、死にたくなければ、三つ数える内にここから立ち去りなさい。」

「え～今回はミッション失敗という事で**…**ひとまずスタジオにお返しします。」

男はそう言うと、廊下を拳(こぶし)で打ち抜き、下の階へと逃れて行った。

「キャアァァーッ！！」

あまりの爆音に寝込みのはるかと沙織は驚き、一時、蜂(はち)の巣をつついたような騒ぎとなった。

「リンシャンさん!?」
「油断してたようね…寝首をかかれる所だったわよ。」
「お体の方は良くなられたんですか？」
「お陰さまで。今日はお別れを言いに来たんだけど。」
「中国に帰られるんですね。」
「えぇ。」
襲撃から難を逃れた秀樹が戻って来ると、はるかの部屋の荒れようを見て、たいそう驚いていた。
「大丈夫だったか？はるか。」
「…うん。リンシャンさんが助けてくれて…。」
「―そうか。で、お前を襲おうとした奴はドコに行った？」
「逃げたみたい。」
「―リンシャンさん。まさか、わざと逃がしたんじゃないだろうな？」
「お兄ちゃん！リンシャンさんは、わたし達を助けてくれたくれたのよ。そんな言い方したら可哀想だわ！」
物々しい光景に、珍(めずら)しく秀樹は取り乱し、事情も呑み込まずつい棘(とげ)のある言い方をしてしまっていたが、
はるかの言葉で我に返り、リンシャンに謝罪(しゃざい)しようとしたが―
「…いいのよ、はるかちゃん。あなた達と私は、つい数日前まで激しく争ってた相手同士だから…あなたのお兄さんが、動揺して私を疑うのも無理はない事だわ。」
「…すまない。ちょっと俺も興奮して言い過ぎた。はるか達を助けてくれて礼を言う。」
「お礼なんていいのよ…それよりも故郷に帰る前に、私の知ってる情報を、あなた達に伝えておいた方がいいようね。」
「あぁ、頼む。」
「…とは言っても、私も詳(くわ)しいって訳じゃないから、参考になるかは分からないけれど…。」
「あなたはダークエンジェルズの幹部じゃないのか？」

「私達は、便宜上(べんぎじょう)、結託(けったく)していただけで本音はちがうわ。うわべでは協力し合っているように見せかけても、心の奥底ではお互いに何を考えてるのかなんて分からないのよ。だって、私達は秘宝を狙うライバル同士なんですもの。」
「なら今日、俺達を襲ってきた奴らの事で、何か知ってはいないだろうか？」
「どんな人かしら？」
「スゴく怪力の大男だった。」
「このホテルを襲いにきた男と同じ輩(やから)みたいね。」
「あれは、おおよそ人間に出せる代物ではなかった。このホテルに来た男も、そんな感じなのか？」
「この床の穴は、私が見た男が素手で割って出来た物よ。」
「素手で！？…まさか。」
「本当の話だわ。」
「あなたはその男の顔をみたのか？」
「えぇ。」
「その口ぶりだと顔見知りのようだが…」
「えぇ、前に一度だけ会った事があるわ。」
「どこで？」
「その男が、私にあなた達の情報をリークしたのよ。」
「一体、どうやって俺達の情報を…。」
「そこまではわからないわ。」
「俺を襲った男と、このホテルに来た男とは何か関係があるのだろうか。」
「あなたを襲った男を、私は見てないから確かな事は言えないけど、おそらくは仲間なんでしょうね。」
「何故そう言える？」
「訊き出したからよ…さっきこのホテルに来た男と初めて会った時にね。」
「身辺調査(しんぺんちょうさ)をしたということか？」
「そうよ。秘宝に関する情報をわざわざリークするなんて、普通じゃ考えられないから聴取したの。」
「それで、ソイツはどんな事を言ったんだ？」
「“神の使者”だといったわ。」

「“神の使者”?」
「そうよ。この世界には秘宝を与えた、“神”と呼ばれる存在と、それに対立するもう一人の神がいると言ってたわ。」
「そんな…そんな話は聞いた事がない…。」
「秘宝を世界に与えたとされる神。その神と反目(はんもく)する神から選ばれた使者であると、彼らはそう自分達を称していた。」
「そ、そんな…馬鹿な…。」
「そこからはオレが話すよ。」
ボロボロのスーツを着た正友が秀樹達の前に現れた。
「お前も襲われたのか？」
「あぁ…ったく、せっかくの一張羅(いっちょうら)が台無しだよ…。」
「誰に襲われたんだ？」
「…俺の元兄弟子さ。」
「兄弟子!?…それは龍球拳法のか？」
「そうさ。親父から昔聞かされた話なんだが…ソイツの名は八野。その八野って兄弟子が、オレの仲良くしてた弟弟子の広介って奴を連れて失踪(しっそう)したんだ…で、オレが泣きながら親父に、なんでそんな事をするのか問いかけたら、親父はこう言ったんだ。“神隠し”に遭ったんだって。」
「…神隠し？」
「あぁ。後になって詳しく教えてもらったんだけどさ。八大心拳の継承者の中には、自らを神と名乗る奴がいて、人里に降りて誰かを誘拐(ゆうかい)しては自分の手下にしたり、悪い事をさせるんだってさ。」
正友の説明に、リンシャンが補足を加えた。
正友が言う、神隠しを行っている者とは地球外生命体であり、近年、目撃情報が多発しているUFOや宇宙人の内の一派であると。そして、彼らはその驚異的(きょういてき)科学力を背景に、世界を陰で支配しているとも噂(うわさ)されているとも付け加えた。
「奴らは一体、何のために地球に干渉(かんしょう)してくるんだろうか…？」
秀樹はそう言って、リンシャンの話に対し疑問をあらわにした。

“神”を名乗る輩(やから)が、地球に対して取っている行動の動機が見えて来なかったからである。犯罪や戦争などの事件には、必ずその発端となる原因が存在する。

しかし、彼らの行動には、まるで一貫性がない。秘宝を手にしようとしているようでもなく、世界を陰で支配してるとは言ってはいるが、実質的には何の侵略の形跡も見られず。目立った物はと言えば、唯一、**UFO**の発見例に伴う人攫(ひとさら)いくらいしかない。

そこが理解できなかったのだが、その問いかけに、意外な答えがリンシャンから返ってきた。

「彼らのやるコトに意味なんてないわ。」

「それはどういう意味だ？」

「子供が**TV**ゲームで遊ぶ。そんな感覚で、この地球を弄(もてあそ)んでいるのよ**...**。」

リンシャンが言うには、育成のシュミュレーションゲームでもやっているかのように、“神”と呼ばれる存在は、地球を操作しているとの事であった。

自分達の持つ先進技術を小出しに与え、文明を発展させたり、時には紛争や戦争を煽動(せんどう)したりと。世界は、あくまでも彼らを中心として、発展・形成をなして来たのだと言う。

それが本当であるならば、生活や欲に溺(おぼ)れ、あくせくと生きる人間達をあざ笑い、そこで地道に努力しようとする者達をも冒涜(ぼうとく)するかのような話である。そのような話は、その場にいる者すべてが断固として認める事ができずにいた。

人間の努力いかんに関係なく、“神”などと名乗る者達によって、現代社会が築かれたとするならば、個人の人生における歩みはおろか、先人の努力も功績も、一切、意味をなさない事になり、人は尊厳(そんげん)も価値もない虚(むな)しいものとなってしまう。リンシャンの話への理解度は個々に異なっていたが、全員が共通して不快感を感じていた。

「俺はそんな話、認めない…」
「認めようと認めまいと自由だけど、歴史の転換期には、必ずと言っていい程、彼らが関与しているというのも事実よ。」
「じゃあ何か？神とか言ってる奴らってのは、オレ達を玩具(おもちゃ)にして戦争させて、それでオレ達は苦しんでるってのに、ソイツ等は喜んでるっつうのかよ！！」
「そう取れなくもないわね。」
「ふっざけやがってぇ…ソイツら、オレがまとめてブッ潰してやるッ！」
秀樹に続き、話しに割って入ってまで激昂(げきこう)している正友。それをなだめるかのように、冷静さを取り戻した秀樹が口を開いた。
「リンシャンさん…。」
「何かしら？」
「定かではない話は置いといて。さっき、俺やはるかを襲った奴らを、知ってるみたいに言ってたが。そいつらに関する情報が、他にあったら教えてくれ。」
「“ゲーハモテーヌ”。彼らはそう名乗っていたわ。」
「ゲーハモテーヌ？…それはどういう意味の言葉なんだ？」
「神達の使う言葉で、〝鉄人〟という意味だとか言ってたわ。」
「また…“神”か。」
「神から力を得た特権として、そう名付けられたそうよ。」
「何のために、神とやらは人に力を与えたんだ？」
「彼らの崇(あが)める神は退屈(たいくつ)してて、好敵手を求めていると…自分達は、そんな存在を探す為の尖兵(せんぺい)だと言ってたわ。」
「尖兵か。フッ…体のいい玩具となるかどうか、俺達は試されたって事か。」
「ふざけやがってッ。次に見かけたら、絶対にブッ飛ばしてやるッ！」
分かりやすい怒りの表し方をする正友に対し、なだめ役にまわっている秀樹であったが。はるかには、秀樹も怒っているように見え、その方がよっぽど恐ろしいように思えていた。

第二章　奇襲～完～

次章へつづく

# バトルボーラーはるか
# 第二集 星間戦争
# 第1章・奇襲

http://p.booklog.jp/book/58344

著者 : Ψ　(Eternity Flame)英　樹（はなぶさ　いつき）
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile
ブログ：http://profile.ameba.jp/jjmmd123/
編集：Ψ　(Eternity Flame)　秋乃空（あきのそら）
ブログ：http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします
http://p.booklog.jp/book/58344

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/58344

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ